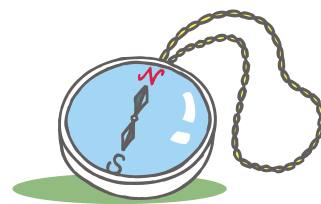


羅 針 盤

第 **24** 号

令和6年12月16日（月）



◆ 日本被団協にノーベル平和賞

昭和20年（1945年）8月に、広島と長崎に原子爆弾が投下されてから、来年で80年を迎えます。核兵器の廃絶を被爆者の立場から訴え続けてきた、被爆者の「日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）」が、2024年のノーベル平和賞に選ばれたことは、生徒の皆さんも報道発表によって知っていることと思います。核兵器のない世界を実現するための努力と、核兵器が二度と使用されてはならないことを証言によって示してきたことが受賞となった最大の理由です。日本では近年、物理学賞や化学賞、生理学・医学賞といった分野での受賞が続いていましたが、ノーベル平和賞受賞は、昭和49年（1974年）の佐藤栄作元総理大臣が受賞して以来の50年ぶりの出来事となりました。ノーベル平和賞は、これまでに、マーチン・ルーサー・キング牧師やマザー・テレサ、ダライ・ラマ14世、ミハイル・ゴルバチョフソ連大統領、アウンサンスーチーさん、バラク・オバマ米大統領、マララ・ユスフザイさんなどが受賞されてきました。（※肩書は、受賞当時です。）

日本被団協は、広島や長崎で被爆した人たちの全国組織で、原爆投下から11年後の昭和31年（1956年）に結成されました。当時は、日本のマグロ漁船の「第五福竜丸」の乗組員が、太平洋のビキニ環礁で行われたアメリカの水爆実験で被ばくしたことをきっかけとして、国内では原水爆禁止運動が大きな高まりを見せてい



るときでした。日本被団協は、それから68年間にわたり、核兵器廃絶を世界に訴える活動や被爆者の援護を国に求める運動を続けてきました。ノーベル平和賞の選考委員会は、受賞者に日本被団協を選んだ理由として、「日本被団協は“ヒバクシャ”として知られる広島と長崎の被爆者たちに

よる『草の根の運動』で、核兵器のない世界を実現するために努力し、核兵器が二度と使われてはならないと証言を行ってきた」と評価しています。また、1945年8月以降、核兵器が戦争で使われていないことについて「日本被団協や、ほかの被爆者たちのなみなみならぬ努力によって『核のタブー』は定着してきた」と高く評価しています。さらにアメリカが広島と長崎に原爆を投下し、多くの人の命が失われて来年で80年になることに触れながら「今の核兵器ははるかに強力な破壊力がある。何百万もの人々を殺害し、気候にも壊滅的な影響を及ぼす可能性がある。核戦争は私たちの文明を破壊するおそれもある。」と警鐘を鳴らし、「今年のノーベル平和賞を日本被団協に授与することで、肉体的な苦痛やつらい記憶にもかかわらず、大きな犠牲を伴う経験を平和への希望に捧げてきたすべての被爆者をたたえたい。いつの日か、被爆者が存在しなくなるときが来るだろう。しかし、記憶をとどめる継続的な取り組みによって、日本の新しい世代は被爆者たちの経験とメッセージを継承している。彼らは世界中の人たちを鼓舞し、伝え続けている。彼らは核兵器をタブーにするという、人類の平和な未来に不可欠な条件を維持することに貢献している」と、日本被団協や被爆者たちの活動を受け継ぐ意義を強調されました。この意思を、今を生きる私たちが引き継ぎ、次の世代へとしっかりとバトンをつなぐことで、戦争のない平和な世界がつくられていくはずです。その責務は大きなものではありませんが、引き継いでいかなければいけないはずです。

